

大学教育における遠隔授業の試み

—3タイプ、その成果と課題—

Attempt of the remote lecture in the university education
— 3 types, their achievements and issues —

谷尻 治

TANIJIRI Osamu

(和歌山大学大学院教育学研究科教職開発専攻)

受理日 令和3年1月31日

抄録：コロナ渦で、受講生がオンラインのみで講義を受けるもの、オンデマンドで受けるもの、受講生の密を避けるために隣接教室に分かれオンラインで繋いで受けるものといった3タイプの講義を担当し、その内容を整理した。対面で行ってきた従来の学びをいかに保障するのかを当座の目標としていたが、どのタイプの講義でも授業者の工夫と遠隔授業を実施するためのサポート体制の充実で十分な学習が展開できることが明らかとなった。しかし、学びを深めるためには双方向性の保障が鍵であり、この点では課題があることがわかった。

キーワード：遠隔授業、オンライン、オンデマンド、課題の共有、双方向性

1. はじめに

筆者は2020年度、コロナ渦で様々なタイプの遠隔授業や、遠隔授業と対面授業を組み合わせた授業を担当した。担当した遠隔授業は①オンラインのみによる授業、②複数教室をオンラインで繋ぐ授業、③オンデマンドによる授業という3つのタイプに分類することができる。

A 大学看護学部の「教職論」15コマはすべてオンラインで実施し、B 大学教育学部の「特別活動指導論」8コマは受講生の密を避けるため5教室に分けてオンラインでリアルタイムに教室を繋ぎながら実施した。C 大学大学院教育学研究科の「学校・学級経営Ⅰ」15コマはオンデマンドで実施した¹⁾。

授業運営のスタイルがまったく異なるのは、それぞれの大学の事情によるものが大きい。コロナ感染拡大が懸念される中、各大学が予防対策を取りつつ授業方法を模索していた頃に実施したことが、その背景としてある。

筆者は中学校教諭として34年間の勤務経験があり、授業というのは対面で行うことが当然という意識が刷り込まれていた。授業は授業者と受講生が同じ空間に滞在し、授業内容を共有しつつ協働して創っていくものであること(共有と協働)、また、授業者と受講生

の両者が互いに交流すること(双方向性)や瞬時に反応すること(瞬発性)が授業の成否を分けると考えてきた。しかし、コロナ渦、特に2020年の春から夏にかけてはウイルスの特性や感染予防対策も十分か否かが判断できず、勤務先の方針に従うことが求められた。

このような状況で、遠隔授業経験のない教員が果たしてどれだけの学びを受講生と一緒に創り上げることができるのか。鍵は受講生が「一緒に参加している」と実感できる参加型学習が出来るかどうかによると考え、いずれの授業でも、交流の場を設けたり、授業者と受講生が応答できる場面を意識的に増やしたりすることを考えた。

本稿は、3タイプの異なる条件のもとで、どのような工夫を行い、受講生がそれをいかしてどのような学びを展開したのかを整理し、それぞれのスタイルによる成果と課題について明らかにすることを目的とする。

2. オンラインのみによる授業

「教職論」は養護教諭免許取得を希望するA大学看護学部(以下、看護学部)2年生が受講する授業である。90分の授業を15週にわたって、毎週1回ずつ実施した。2020年度の受講生は6名であった。

大学から「Zoomを使ってオンラインで実施」という方針が早々に出され、2020年度は当初の計画より1週間遅れて、4月中旬に開講した。看護学部の教員が毎回遠隔操作のサポート役として教室に同席し、トラブル発生時にはサポートするという体制がとられた。Zoomに不慣れな筆者（以下、授業者）は当初操作に戸惑う場面があったため、サポートに助けられた。ただし、看護学部の教員は授業内容には関わっていない。

2.1. 授業の進め方

授業の進行に当たっては、以下のような進め方を基本とした。

①毎回の授業で用いるワークシートや資料は、授業の1週間前には大学から受講生に配信し、受講生はあらかじめそれらをダウンロード&プリントアウトして使用するよう指示した。

②看護学部ではプライバシーの保護から受講生の顔出しを求めないとなっていたが、受講生に了解をとり、全員が常に顔出しをして、互いの様子が見えるようにした（Zoom機能を利用して部屋の背景は変更できる）。さらに、授業開始時と終了時には、マイクをオンにさせ、一緒に挨拶をすることで、教室で学習するのと変わらない雰囲気をつくるよう努めた。

③Zoomのブレイクアウトセッション機能をいかし、毎回の授業で必ずグループに分かれて話し合う場面を複数回設定した。その際、グループのメンバーは週ごとに異なるように授業者が設定した。これは受講生間の交流をより活発にするための工夫の一つである。グループが固定化すると、関係性が固定化し、知らず知らずのうちにリーダー的に振る舞うなどの役割分担まで固定化しやすい危惧があるためにこういった配慮をした。

④受講生に発言を求める際は、固有名詞で名前を指名した。授業者が個々の受講生を知った上で授業を展開しているのだという意識を持たせるためである。グループでの話し合い後にその内容を発表させる場合は、グループ（1班・2班）を指名して、メンバーの誰かが発表することとした。時間の見通しを事前に示しておき、終了までに誰が発表するのかを決めておくよう指示しておいた。

⑤グループが話し合う場面ではブレイクアウトセッションの機能をいかし、授業者も途中、各グループにそれぞれ2～3分ほど『参加』し、話し合いがスムーズでない場合のみ必要に応じて助言した。その際は圧力をかけないように、授業者の顔出しは控えた。

⑥授業後には必ず「授業コメント」を書かせた。通常は授業の最後に5分程度を残してA4版用紙に10行程度書かせるスタイルを取っているが、オンラインとなってからは、90分の授業後に指定のWord用紙に授業コメントをまとめさせ、メールに添付してその

日の午後10時までに授業者に送ることとした。送信ミスなどで届いていない際は翌朝にその旨を受講生へ伝えたため、翌日の昼頃には毎回授業コメントは全員が提出できていた。授業コメントは次時の冒頭で紹介するなどして、授業でもいかに場面を設けた。

2.2. 授業での工夫

「教職論」は教員免許を取得するための入門的位置づけの科目である。受講生は全員が看護師免許を取得することに加え、養護教諭免許の取得も目指している。そこで、この「教職論」では、あえて養護教諭という立場を尊重した授業内容を随所に取り入れている。例えば、第6回「養護教諭の職務の実際」では養護教諭として学校現場で起こり得る問題を取り上げて、自分ならこの場面でどう対応するかを考えさせている。

また、第12回「同僚との協働」の後半では保健委員会の活性化のための具体案をグループで練らせて交流しあうといったことも行う（2019年度受講生はここで考えた保健委員会活性化案をもとに、健康に関する問題を学園祭でキャンパスのあちこちに貼り出し、スタンプラリー形式で正解がそろうとメダルを授与するというものを実現していた）。

第6回「養護教諭の職務の実際」の後半で「性に関する学習を積極的に進めたい」と述べた経験の浅い養護教諭が教頭から「そのような学習内容は、学習指導要領には記載されていない」と強く反対されたという想定をした上で、「あなたは、小・中学校で性に関する学習を積極的に進めることについてどう考えるか」という課題を設定した。「賛成か反対か」のいずれかを選ばせて、その理由を「今日のコメント」にまとめさせ提出させた。これらは次に述べる第8回の授業で「性に関する学習 私たちはこう考えた!」で取り上げるなど、双方向性の担保に努めた。

第8回「カリキュラムの編成」では、カリキュラムと学習指導要領の変遷を学習した後、「性に関する学習は学習指導要領ではどう扱われているか」を確認させ、特に性行為や避妊などは日本の義務教育段階では全く扱っていない現状をおさえた。また、2週間前に課題として「性に関する学習の状況－5つの資料から読み解く」を提示し、「私たちが資料を読んで感じたこと・考えたこと」を1週間前に提出させた。その上で、グループのメンバーとじっくり交流するという段階を取り入れた（図1）。

このような学びを展開していると、オンラインか否かであることはほぼ関係がなくなり、むしろグループで討論する際は、他のグループの声が漏れ聞こえてこないため、落ち着いて自分たちの意見を出し合い深め合えるということが回を重ねるごとにわかってきた。

表2 授業評価アンケート（一部、抜粋）

年度	2020	2019
授業内容をよく理解できたと思うか。	5.00	4.76
学習しやすい授業環境（静かな環境等）が保たれていたと思うか。	5.00	4.76
この授業は遠隔環境でも学びやすかったかと思うか。	4.67	項目なし
この授業は総合的に満足できたと思うか。	5.00	4.94

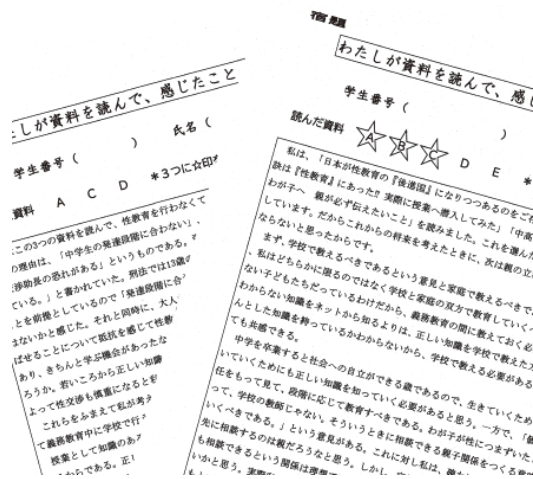


図1 性に関する学習、私たちはこう考えた

2.3. オンライン授業の成果

講義を終えてのまとめと振り返りで受講生が書いた授業者へのメッセージを一部紹介する（表1）。

表1 講義を終えて、授業者へのメッセージ

- ・私はこの講義で初めてリモートの話合いをして慣れることが出来たので、他の講義でも抵抗なく行うことができました。
- ・「教職論」では、学生同士のディスカッションが多く、みんなのさまざまな意見を聞いて考えることができました。自分はグループワークや発表は苦手でしたが、だんだん苦手意識が薄れて、それ以上にグループワークの楽しさや、自分とは違った皆の意見を知ったりする中でグループワークの大切さなども知ることができたと思います。
- ・「教職論」の授業が毎週楽しみと思えたのは、先生が能動的な学習をさせてくれたからだと思います。ぜひ、ほかの先生にもこの授業を受けてほしいと思いました。（傍線は筆者。一部抜粋）

感想を読む限りでは、2019年度の対面授業と変わらない程度の学びが保障できていたようである。

次に受講生の授業評価アンケートを取り上げる²⁾。

授業評価アンケートは5段階で受講生が評価しており、5点満点である。2020年度は新たに加えられた項目の「遠隔授業でも学びやすかったかと思うか」で、1名が「4. ややそう思う」と回答した以外、上記項目については全員が「5. そう思う」と回答しており、オンライン授業でも授業の質は保障されていたことがわかる（表2）。ただし、受講生が少数であったため、これが大人数になった場合は授業の進行も同じようにはいかないであろう。どのような影響が出るのか、今後の検証が待たれる。

3. 複数教室をオンラインで繋ぐ授業

「特別活動指導論」は小学校教諭免許取得を希望するB大学教育学部2年生が受講する授業である。100分の授業8回分を二日間で実施する集中講義で、2020年度の受講生は71名（2019年度は未開講）であった。

大学から「受講生の密を避けるため、1教室に入る人数を20名以下としたい。70名を超えるため、5教室に分け、Zoomを使ってオンラインで教室を繋いで実施」という方針が出された。また、「冒頭のオリエンテーションは全員を集めて行ってほしい」との条件も追加された。円滑に運営できるようにということで、遠隔操作のサポート役として事務職員が4名程度、教室付近に待機し、トラブル発生時にはサポートするという体制がとられた。授業者はメインの教室で授業を進行し、各教室の大型のホワイトボードに授業者と共に、他教室の様子も映し出される状態であった（図2）。結果的には大教室で一堂に会して実施する授業と大差なく進行できた。

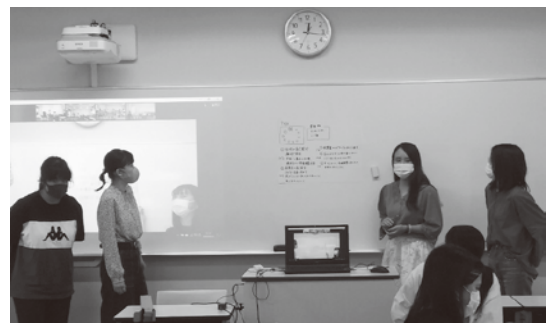


図2 5教室をオンラインで繋ぐ講義風景

3.1. 授業の進め方

授業の進行に当たっては、以下のような進め方を基本とした。

①受講生は4名で1グループとし、合計18班編成とした。1教室には3つの班（12名）～4つの班（16名）の学生が集う形で行った。

②1回目と8回目、つまり冒頭と最後の授業では体育館で受講生が一堂に会して授業を行った。冒頭の1回目はオリエンテーションを含んでいるが、科目（特

別活動指導論)の趣旨から、この授業ではワークショップ形式も取り入れ、受講生自身が児童になった気分で特別活動を体験する場面を随所に入れた構成とした。1回目の前半30分は密を避けつつ、アイスブレイクを行った。受講生にはこれまであまり面識のない人とも親密になるきっかけとなったと好評だった。

③授業者はメインの教室で進行するが、他教室も比較的隣接しており、5～20分程度のグループワーク(テーマを設定して討論したり、課題を与えて完成させるなど)の間は出来る限りメイン以外の教室へ足を運び、グループワークの様子を見守ったり、受講生に声をかけたりして、通常の対面授業と変わらないような雰囲気をつくるように心がけた。

④受講生に発言を求める際は、授業者のいない教室からも積極的に発言させるために個人や班を指名した。これは、授業者が教室にいても、受講生に疎外感を感じさせない配慮である。

⑤1日目の授業終了時に「本日の振り返り」を書かせた。また、同時に「私はこんな教師になりたい」と題して課題文を書かせた。これは後述する「まとめの会」(教師になるスタートダッシュの会)でも活用することを念頭に置いていた。いずれも、自分たちが授業を創っていくという参加型学習の一環でもある。

3.2. 授業での工夫

この授業では体験活動を授業に多く入れた構成を組んだ。一つは科目「特別活動指導論」の特性、つまり特別活動の意義や指導のポイントを講義形式で伝えるのみでなく、体験として学ぶことで、指導力の育成が図れると考えたこと。二つ目は、受講生同士の繋がりがコロナ渦だからこそ重要であるという認識からである。受講生が協働して創っていく活動を節目に設けることで受講生の能動性や主体性も高まると考えたのである。

たとえば「児童会・委員会活動」を取り上げた際には、「図書委員会を活性化」と称し、仮想の図書委員会担当顧問として小学校での読書活動をいかに活発にするかのアイデアを班で相談して発表・交流させた。また、4回目「行事指導」では、一編の詩『おがわのマーチ』の群読を練習した後、その詩のリズムにのせてボディパーカッションに取り組みさせた。当初は群読の発表を考えていたが、感染予防のため急遽内容を変更し、わずか1分程度であるが、教室ごとに『おがわのマーチ』に合わせたボディパーカッション(無言で行えるため飛沫が飛びにくい)を創作させ、2日目の8回目「まとめの会」で体育館のステージに順に上らせて披露させた(図3)。



図3 ボディパーカッションの発表場面

4回目の30分と8回目前半の20分、合計1時間にも満たない時間で教室のメンバーが呼吸までそろえてダンスを完成させるという活動は、授業者の予想以上に受講生の心理的繋がりを生み出すという効果を上げた。昼休み返上で取り組んでいた教室がたくさんあったことから、受講生のボディパーカッションへの熱中度がうかがえた。

なお、この8回目「まとめの会」の後半では先述したように、体育館に受講生全員を集めている。1日目の4回目に「まとめの会」(教師になるためのスタートダッシュの会)という集会行事を授業者が提案し、受講生の賛同を取り付けた上で(学級なら総会に匹敵)、小学校での「集会行事」のイメージで開催した。会の内容は「開会宣言」「各教室のボディパーカッション発表」「私はこんな教師になりたい(代表2名)」「1日目の振り返り(代表1名)」、最後に授業者が教師役となって「四つの拍手」を送るという流れである。「四つの拍手」は授業者が受講生を労りながら今後の学業への意欲が増すように言葉を構成し呼びかけたものであり、受講生の心理的な繋がりを増す効果を期待したものであった。

3.3. 複数教室をオンラインで繋いだ授業の成果

受講生は予想以上に、授業を通じて交流を深め互いの意見などを交流することで刺激を受けたようである。ボディパーカッションの創作中は、教室前面のホワイトボードに映し出される他教室の練習風景に焦りを感じながら、自分たちも良いものを創ろうと良い意味での相互刺激がみられた。講義を終えての振り返りで受講生が書いた授業者へのメッセージを一部紹介する(表3)。

次に受講生の授業評価アンケートを採り上げる³⁾。授業評価アンケートは5段階で受講生が評価しており、5点満点である。2020年度から新たに開講された科目であり、通常の対面授業との比較はできない。「意欲的・主体的に取り組みましたか」との問いに「5. 強く思う」が83%、「4. そう思う」が15%の回

答であった。教室を繋ぐというオンライン授業でも、授業者が頻繁に受講生と意思疎通を図ることで、受講生の学習意欲は高められるということが明瞭となる結果であった(表4)。

表3 講義を終えて、授業者へのメッセージ

- ・2日間とも、グループメンバーとの関わりや、教室のメンバーともたくさん関わりがあったのがすごく良かったです。KJ法的手法やホワイトボード・模造紙を用いた発表もすごく分かりやすく、他の班の意見などが目に見えて分かるため、なるほど!そんな方法もあるのか!など、たくさんの発見をすることができました。2日間、とても楽しく授業を受けることができました。
- ・内容は本当に心に残るものばかりであり、何も知らなかった対応策や関わり方などを学ばせて頂くことができました。さらに、(授業者は) 一人ひとりをしっかりと見て頂き、それぞれに声をかけてくださる先生であり、私の一つの目標にもなりました。
(傍線は筆者、一部抜粋)

表4 授業評価アンケート(一部、抜粋)

年度	2020	2019
意欲的・主体的に取り組みましたか。	4.81	未開講
互いに学び合う機会がありましたか。	4.78	
新しい知識・考え方や技術・技能を得られましたか。	4.58	
受講してよかったと思いますか。	4.63	

4. オンデマンドによる授業

「学校・学級経営Ⅰ」はC大学大学院教育学研究科教職開発専攻(教職大学院)の授業実践力向上コース1年生(全員がストレートマスター)が受講する授業である。この授業は、和歌山市教育委員会の協力の下、和歌山市立小・中学校新規採用教員も受講している。全部で15回の内容を4~5月にかけて実施している。2020年度の受講生は授業実践力向上コース12名と新規採用教員10名、計22名であった。

通常は大学院において対面で実施する授業であるが、2020年度はコロナ感染予防対策で大学への入構が認められなかったこと、加えて新規採用教員は小・中学校の休業期間中も勤務校での通常勤務が継続していたため、平日の夜間や休日に受講できるように、原則オンデマンドで実施することとした。大学の推奨で、Moodleを使って、動画配信や資料配付、課題に対す

るフィードバック等を行った。

なお、「学校・学級経営Ⅰ」は筆者以外に2名の大学教員も授業運営を担当している。ここでは筆者が授業者となって実施した授業についてのみ扱うこととする。

4.1. 授業の進め方

授業の進行に当たっては、以下のような進め方を基本とした。

①通常、教室で授業者が説明する講義の部分はパワーポイントに音声を入力した動画を作成し、配信した。

②「学校・学級経営Ⅰ」の到達目標の一つを「どの子も安心できる学級経営ができる教師としての実践的指導力を習得する」と設定している。この目標を達成するため、「学級通信の作成」や「家庭訪問のロールプレイ」「学級懇談会の計画」など、実際に担任として身につけておくべきことをオンデマンドでも学習できるように工夫した。詳細は、4.2.の「授業での工夫」で述べる。

③オンデマンドでの授業は、授業者から受講生への一方通行になりがちである。これを避けるため、フィードバックを重視した。受講生が課題を提出したのち、授業者が課題へのコメントを付け、受講生各自に配信することで「双方向性」の担保に努めた。

④さらに、受講生同士が、提出された課題を共有したり、互いの課題に対してコメントを付けたりするなど「共有と協働」の場を設けた。

⑤授業者が、受講生の提出した課題の中から深く学べているものを取り上げ、どこが優れているのかを解説した資料(「GOODワークシート」と名付けた)を配信した。4.2.4.で再度述べる。

⑥受講生全員が視聴・視認できる場(Moodle)で、どの受講生がまとめた課題も、少なくとも一度は全員で「共有」できるようにし、授業者が全員の学習状況を把握して進めていることを受講生が実感できるようにした。

4.2. 授業での工夫

4.2.1. 学級通信・教科通信

授業での工夫として第3回「学級通信・教科通信」を取り上げる。この授業では、学級担任や教科担任が書く「通信」について、その基礎・基本をおさえる。モデルとなる通信をいくつか取り上げてイメージを膨らませてから、1週間程度の期間を与えて、各自が「想定第1号」の通信を書き上げ、提出することとした。Moodleの課題提出箱という機能を利用して受講生全員に通信を提出させた後、授業者がその中から10名分の通信を選出し、公開した。

4.2.2. 通信の交流

Moodleで公開された10名の通信を読ませた上で、新たな課題として「学級通信の交流」と題し、「他の人が作成した学級通信を読んで、良いと思う点、自分にはないと思う点、取り入れてみたい点について、可能な限り列挙しましょう」「もし、あなたの学級通信を修正するとすれば、どういったところですか？あるいは次号を作成する際に、追加したい点はどういったことですか？具体的に説明してください」という課題を設定した。授業の核である「共有」を図るためである。A4版ワークシート1枚に受講生がまとめたものが提出された。

4.2.3. ポイントの解説

次に、授業者が選んだ受講生による優れた通信10名分をパワーポイントのスライドに1枚ずつ貼り付け、それぞれについて、授業者が優れていると判断したところを音声付きで解説した(図4)。

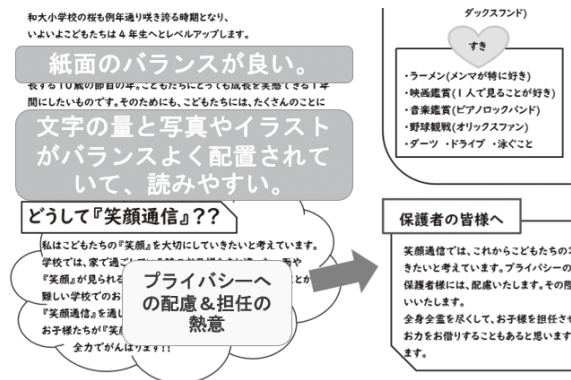


図4 受講生が作成した通信の優れた点を解説

上に示したものがその一例である。受講生が書いた想定第1号の通信に「紙面のバランスが良い」「文字の量と写真やイラストがバランスよく配置されていて、読みやすい」「プライバシーへの配慮」などをアニメーション機能も利用しつつ太文字で示し、さらに音声でも解説している。

4.2.4. 交流されたワークシートをさらに解説

上記のような工夫を重ね、「共有」や「双方向性」を担保しつつ、さらに受講生の意欲を高めるべく、提出されたワークシートの中から、優れたものを6名取り上げて「GOODワークシート」として紹介した。その際、課題に対してどのような視点でレポートをまとめれば良いのかを「ワンポイントレッスン」として授業者が300字程度で解説した文を付けた。通常の教室なら授業の冒頭で口頭により述べることが出来るが、オンデマンドでは難しい。しかし、オンデマンドであることで、取り上げる数が増やしやすく、また、解説を書き込んでおくことで、受講生は繰り返し確認

できる。オンデマンドの長所をいかした工夫の一つである。解説の一部を紹介する(表5)。

表5 GOODワークシートとワンポイントレッスン

<p>※冒頭で3点を簡潔におさえる。</p> <p>私が修正する点は三つあります。一つ目は写真を用いる、二つ目は保護者に読んでもらう工夫、三つ目は伝えたいことを最後に簡潔に伝えることです。</p> <p>まず一つ目の写真を用いることよって、…(中略)「読んでみようかな」と興味を持ってくれるきっかけにもなると思います。</p> <p>二つ目の保護者に読んでもらう工夫…(以下略)</p> <p>三つ目の伝えたいことを最後に簡潔に伝えることによって記憶に残りやすいですし、学級通信を作る目的を理解してもらうことに繋がると思います。…(以下略)</p> <p>谷尻のワンポイントレッスン</p> <p>〇〇さんのワークシートで注目したいのは二つ目の*「学級通信の修正……」の欄です。</p> <p>文章を書いてもらうと、ただだだと思いつくことを思いつくままに(と感じるのですが)書いている人がいます。起承転結や序破急といった文章の骨格がなく、箇条書きのように書く人です。一つ目の*は「可能な限り列挙」とあるので箇条書きでも問題ないと思います。しかし、二つ目の*は「具体的に書きましょう」という指示があります。こういう課題の場合、みなさんはどんな風にまとめるでしょうか?</p> <p>〇〇さんは自分の修正点・追加したい点を「三つあります」とまず冒頭で述べ、その3点を簡潔におさえたうえで、具体的な説明に入っています。その際も「一つ目の……」「二つ目の……」と何点目について述べるのが明確です。また、それぞれの点でも「例えば」と具体的に説明するという流れを繰り返しています。今後、何かについてまとめる際にこういった「文章の骨格」を意識した書き方をすると、(通信も)格段に伝わりやすいのが出来ると思います。ぜひ、参考にしましょう。(一部、抜粋)</p>
--

4.2.5. オンデマンドによる授業の成果

受講生がワークシートに記した文章を一部紹介する(表6)。

受講生は授業者が予想した通り、他の受講生と学びを「共有」することを通して、より明確に自分の課題を把握できている。さらに、授業者からのフィードバックによる「双方向性」の効果も相俟って、自分が他者から承認されることの重要性にも気付いている。これは教師を目指す者の資質(児童・生徒の意欲を引き出すよう、その行為を積極的に承認する)として非常に重要な点である。

表6 オンデマンドでの共有と双方向性の効果

- ・自分の作ったものが共有される事という経験が本当に少なく、なおかつ自分から1ページ分精一杯考えたものが載るのは嬉しい気分がした。二十歳過ぎの自分でもそう思うのだから、子どもたちも自分の頑張ったものが載るのはもっと嬉しいと思う。出来る限り子どもたちみんなの作品だったり感想だったりをたくさん載せてあげたいと改めて思いました。
- ・他の人が作成した学級通信を読んで思ったことは、それぞれの「個性」が学級通信に出るとことです。また、子ども達や保護者が学級通信を初めて手に取ったときに、この先生はどういう先生なのかということが伝わると思いました。学級通信は自分の名刺代わりになると感じました。学級通信を通して、子どもや保護者との関係のスタートの仕方が変化してくるという心構えを忘れず、本や他の人の学級通信を参考にしながら、より良い学級通信を目指していきたいです。
(傍線は筆者、一部省略)

オンデマンドでは「協働」的に活動するということが大変困難であるが、この「学級通信・教科通信」で行ったような、受講生同士の相互交流や授業者から受講生へのフィードバックを工夫して行うことで、弱点を一定補うことは可能と考える。

なお、この授業については、授業評価シートの提出率が極めて低く⁴⁾、効果の検証としては使えないため、授業評価による得点等については触れないこととする。

5. 遠隔授業の課題

3タイプの遠隔授業でどのような工夫をしながら、授業の質を担保するか。その実際の様子と成果について述べてきた。

次に、これらの遠隔授業の課題を5点あげたい。

(1) オンラインによる授業は、ブレイクアウトセッション機能の活用や授業の運営、また授業前後の課題の与え方並びにフィードバック等の学習保障により、少人数(30名程度)の場合は対面で実施するのと変わらない程度の学習を保障することは可能である⁵⁾。

しかし、これらの工夫なしで、ただオンラインで講義を一方的に進めるような授業では、工夫のない対面授業同様、学習効果は期待できない。

(2) 複数教室を繋ぐオンライン授業は、授業者がいない教室への配慮により、対面授業と変わりなく学び合うことが可能である。しかし、トラブル時を中心としたサポート体制の充実は必須である。また、授業者が常時滞在せず、映像が配信されてくる教室の受講生が

「授業者が自分たちをしっかりと見て、指導してくれている」という実感が持てるような配慮、例えば頻繁に他教室へも顔を出す、他教室から発言を求める、グループワーク時などに積極的に声をかける等も必要である。

(3) オンデマンドによる授業では、「双方向性」と課題の「共有」という点は、授業の工夫により一定の保障は可能である。しかし、「協働」的な活動は実施に難がある。また、授業者が受講生の応答に瞬時に切り返したり、その発言を取り上げて全体へ広げたりする等の「瞬発性」は低い。授業者と受講生が感情的なやりとりも含めて、学びが自由かつ柔軟に進むというスリリングで受講生の心を揺さぶるような刺激的な展開は期待できない。

(4) オンデマンドによる授業は、その質を維持するために膨大な時間を準備とフィードバック等にかける必要がある。担当科目数が多い教員にとって、これはかなりの負担となっている現状がある。その一方、受講生が動画をしっかりと視聴した上で課題に取り組んだのか否かの判断が難しいケースがある。

動画を視聴しながらワークシートを使って、動画の途中に出される課題に取り組みせ、それを一旦提出させてから、次の課題へ進む、言い換えれば前の課題が出来ていないと次へ進めないといった展開にするなど、技術的な工夫が求められる⁶⁾。

(5) 教職関連の授業に限るのかもしれないが、授業者がどのように振る舞いながら授業を進めているのかを体験することは、将来教職に就く受講生にとって、重要なことである。授業者の表情、立ち居振る舞い、立ち位置、声の強弱やトーン、目線、グループワーク時の受講生への声のかけ方などがそれらにあたる。オンラインやオンデマンドの授業では、授業者をロールモデルとして見るのが難しく、これらの「教師の身体的技術」はほとんど学ぶことが出来ない。

以上、限られた字数では、3タイプの遠隔授業の全容を示すことが難しく、それらの核心となる部分を抽出し比較することに絞って、遠隔授業の可能性と課題について筆者の考えるところを整理してきた。

対面での授業が保障されていないオンデマンドやオンライン授業について、子安(2020)は次のような問題点を指摘している。

人の関係に関わって、教室内であれば、誰がどこを向いているか、だれがつぶやいたかがある程度掴めるが、オンラインではそれができない。リアルな教室なら複数の子どもの声や反応を掴むことができる。子ども同士の関係もわずかな仕草や反応から教室のなかで掴むことができる。振る舞いに人の関係を読み、学習にふさわしい人間関係と行為を教えることがオンラインでは難しい。

2020年秋以降、対面授業が復活する中で、改めて対面とオンラインの授業の違いを経験したが、やはりオンラインでの学びの進化・深化は対面授業には及ばないという実感が否めない。今後、時代の流れから大学教育の場でも遠隔授業が一層普及することは間違いなかろう。筆者が整理した課題の克服に向けて、引き続き実践的に研究を重ねたい。

参考・引用文献

- ・渡部淳 (2007)、『教師 学びの演出家』、旬報社
- ・家本芳郎編 (2001)、『家本芳郎と楽しむ群読』、2001、高文研、pp.11-14
- ・和歌山大学教職大学院編 (2018)、『教師になる「教科書」』、小学館、pp.102-105
- ・子安潤 (2020)、「ICTの不可能性とリアル授業の可能性」、『生活指導』No.753、高文研、pp58-65

注

- 1) 「学校・学級経営Ⅰ」は3名の教員で担当し、「教職論」と「特別活動指導論」は筆者が単独で担当した。
- 2) A 大学和歌山看護学部の授業評価アンケートは、「5. そう思う 4. ややそう思う 3. どちらでもない 2. あまりそう思わない 1. そう思わない」の5段階で行われている。「教職論」は、2019年度の受講生17名、回答者17名、回答率

100%。2020年度は受講生6名、回答者3名、回収率50%であった(2020年11月1日現在)。

- 3) B 大学教育学部の授業評価アンケートは、「5. 強く思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない」の5段階で行われている。「特別活動指導論」は、2019年度の開講はなく、2020年度は受講生71名、回答者59名、回収率83%であった(2020年11月1日現在)。
- 4) C 大学大学院教育学研究科の授業評価アンケートは、webサイトで行われているが、コロナウイルス感染予防対策による入構制限などもあり、受講生へのアンケート実施連絡が徹底せず、「学校・学級経営Ⅰ」受講生22名中、回答者は1名のみであった(2020年11月1日現在)。
- 5) C 大学大学院教育学研究科において、筆者は他にも遠隔授業として、「生徒指導と体制」「若手校内研修への支援」の2科目をオンラインとオンデマンドを組み合わせる授業を実施した。また、「学校・学級経営Ⅱ」ではオンラインとオンデマンド、対面授業の3つを組み合わせる授業を実施した。(2020年11月1日現在)
- 6) C 大学大学院教育学研究科の授業「学校・学級経営Ⅱ」の第4回「学級集団の発達」では、動画を視聴しながらワークシートの課題に取り組みせ、完成させたものをMoodle課題提出箱へ一旦提出させた後、次の課題へと進ませるといった展開も試みた。